

女性ソーシャルワーカーのキャリア発達と ライフヒストリー研究

その2 3人の女性ソーシャルワーカーのライフヒストリー

鈴木 真理子

Career Development of Women Social Workers and Life History Study

(2) The Life Histories of Three Female Social Workers

Mariko SUZUKI

In this paper, we would take a close observation of three female social workers. One of them is a single mother, who stepped up from a worker at the elderly care house to care manager and social worker. Second is a nurse who eventually got involved in the life-support for families. She is now trying out for a social worker. Last one is a social worker who decided to study social welfare after her child's sickness. She now works at a NPO specialized in support for the care at home.

These three women have different backgrounds and different ways of making their careers, but it is beneficial to compare them and give some consideration.

ソーシャルワーカーのライフヒストリーと力量形成

1. ライフヒストリー研究の枠組み

以下に述べる3つのライフヒストリー研究は、ソーシャルワーカーの力量形成の契機を探ることを目的に11人のベテランソーシャルワーカーの聞き取り調査をもとに発表した一連の「ソーシャルワーカーの専門的
力量形成過程に関する研究」^{註1)}に関連するものである。

前稿の(その1)では女性の従事者の多いソーシャルワーカーと、同じくヒューマンサービスである看護師や保育士とのキャリアアップの類似点や相違点を分析した。近年注目されるキャリアカウンセリングやキャリアアップについて、特に女性と職業の視点からまとめたが、今回は3人の女性ソーシャルワーカーのライフヒストリーをライフコースと力量形成を軸に分析し

た。

この「ソーシャルワーカーの専門的
力量形成過程に関する研究」の枠組みは、教師や看護師のライフコース研究を参考にしており^{註2)}、2000年9月から2001年6月までの間に、ソーシャルワーカーとしての力量形成過程について、それぞれ2時間程のインタビューを録音し、これを書き起こしまとめたものである。

インタビューでは、自らの力量形成のプロセスを振り返ってもらい、そのなかで特に自分自身の力量形成の契機(きっかけ)となったと思われるエピソードを中心に語ってもらっている。実際には語られた以上の多くの出会いや出来事が存在するはずであるが、ここで注目するのはインタビュー時点での本人の主観的な意味づけによる契機である^{註3)}。

対象者としては、力量形成の過程が追跡できるよう

実践経験が長く、現時点での「専門的力量」として便宜上次の4つの条件、①ソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士 ②おおむね20年前後の現場実践を行っている ③各種団体(所属の施設・機関、職能団体、研究会など)で役職に就くなどリーダーシップを発揮している ④自らの実践を著書・論文執筆、学会発表などで社会に公表している、に合った人物である。人選は共同研究者の周辺で推薦してもらい、協力の意欲があり事例背景が多様になるよう選んだ。

インタビューの内容分析の視点については、公共的ヒューマンサービスとして類似点の大きい教師のライフコース研究を参考にしている。教師についての先行研究の枠組みをソーシャルワーカーの力量形成過程に適用し、仮説的な枠組みとしたものである。

この場合、ソーシャルワーカーにも教師と同様に「ソーシャルワーク実践を支える3つの場」が設定できる。まず、①ソーシャルワーカーの「援助場面」で、そこにはソーシャルワーカー、クライアント、社会資源、面接場面等の相互作用による援助過程が含まれる。次に②ソーシャルワーカーなどの同僚や先輩から影響を受ける「職場」。そして③それらを取り巻く「家庭・地域・社会」である。これら三つの場で起こる出来事に「その他」を加えて、ソーシャルワーカーの実践の領域にふさわしい力量形成の契機とし、仮説的に次の14項目を設定した。

- ① 社会福祉実践上の経験(未経験のケースとの出会い、困難ケースとの出会い、特定のクライアントとの出会い、他職種との出会い等)、②自分にとって意味のある職場への赴任、③職場内での優れた先輩や指導者との出会い、④職場外での優れた人物との出会い、⑤職場内での研究活動(研修会、研究会、読書会、書物など)、⑥職場外での研究活動(各種講演会や教養文化団体への参加)、⑦組合などの団体内的活動、⑧社会的活動(職能団体での活動、ボランティア等)、⑨地域と職場への着目(地域の福祉課題の発見)、⑩福祉界の動向についての考え、⑪社会問題や政治情勢などへの意見、⑫職務上の役割の変化(職位の変化など)、⑬個人および家庭生活における変化(結婚、出産、病気、身内の介護や死亡等)、⑭その他。

この論文の母体となるライフヒストリー研究の11の事例の概要は以下のようである。

11事例の概略

名(性)	現年齢	現在の職種・ポスト
A子	42歳	在宅介護支援センターソーシャルワーカー
B子	50歳	開業社会福祉士(専門学校非常勤講師)
C子	55歳	NPO介護サービス事業所責任者
D夫	49歳	行政介護保険課係長
E夫	46歳	在宅サービス提供施設責任者
F子	52歳	社会福祉法人本部介護福祉部次長
G子	51歳	特別養護老人ホーム施設長
H夫	48歳	特別養護老人ホーム施設長
I夫	50歳	地方自治体外廓団体職員
J夫	50歳	福祉職能団体職員
H夫	53歳	特別養護老人ホーム施設長

今回の報告は上記の11人のライフヒストリーから、個人史の変遷とキャリアアップに特徴のある3人女性ソーシャルワーカー3人に焦点を当てたものである。そのキャリアタイプから「転職キャリアアップタイプ」の2名と「再社会参加・生活体験派タイプ」1名を取り上げた。その他のタイプとしては「継承・発展タイプ」「定着・継続タイプ」と命名されたものがあった。「継承・発展タイプ」は、親や親族が社会福祉法人や福祉施設関係者であり、その縁から職を得て発展させたタイプ、「定着・継続タイプ」とは一度就職した社会福祉法人や職場から移らずに、徐々に職階やポストを上げていくタイプである。

2. 転職キャリアアップタイプ～A子さんの生活史

① 就職前

1959年生まれの女性。短大で保育資格(当時)を取得するものの、20代半ばまでいくつかの仕事を転々とした。27歳のとき、未婚のまま長男を出産。母子家庭として児童扶養手当を受給するという「福祉を受ける」立場となって、人生初の強い屈辱感を味わった。しかしこの経験は、誇れる仕事や人並みの収入を目指す原動力ともなった。

② 就職～5年目

資格を活かして保育園の臨時保育士として約1年間の勤務した後、県福祉事務所家庭児童相談室の嘱託職員として約2年間働く。家庭児童相談員として初めて相談の仕事に関わるようになったものの、自らも幼い子どもを抱えながらの苦しい生活で、しかも嘱託という身分からくる待遇の悪さから、当時、急増中だった老

人保健施設の生活指導員に応募し、採用された。当初は自分をソーシャルワーカーと自覚することはなかったが、そこで施設の立ち上げに関わり、国家資格取得者に囲まれて仕事をするなかで、徐々に自分の役割は何かと意識するようになっていった。

③就職後6年目～20年目

33歳(6年目)、子育てと仕事の両立の厳しい生活が続くなか、アパートの近くに新しい老人保健施設が開設されることとなり、通勤の便の良さから転職した。この施設でも立ち上げから関わり、何もない状態からすべてを作り出していく難しさと面白さを経験した。

ここで人生の大きな転機が訪れる。それは尊敬できる先輩ソーシャルワーカー・Tさんとの出会いで、面接のノウハウだけでなく、視野の広さ、自分や相手に対するゆとり、自分から利用者に近づき問題を解決していく態度など、数多くのことを学んだ。また、医師の指示にただ従うのではなく、ソーシャルワーカーとしての独自の視点から状況を判断し問題解決に取り組もうとする姿勢から、自分のソーシャルワーカーとしての役割を強く意識するようになる。このような経験から、ソーシャルワークをしっかり勉強したいと思う気持ちが強くなり、通信制度を利用して4年制大学を卒業後、社会福祉士の国家資格を目指すことになった。

Tさんから学んだもう一つ大きなことは、後輩を育てることだった。「大抵の人は、自分の仕事ならある程度できるようになる。しかし、人を育てていけるのは選ばれた人だけにできるということ。貴方には後輩を育てていけるだけの大きなソーシャルワーカーになってほしい」と励まされ、いつかTさんのような、または超えるようなソーシャルワーカーになりたいと強く思うようになった。

その後、別の分野でも仕事をしてみたいと思い、1996年の37歳(10年目)のときに、ある病院の精神科ソーシャルワーカーとして採用されるものの、医師を頂点に現状維持を志向する保守的な体質の中で息苦しさを覚えていく。以前の老人保健施設での立ち上げの経験もあって、自分の適性はすでに出来あがったやり方に合わせるのではなく、自分の考えを反映させて新しいものを作り出していくことだと痛感する。同じ頃、社会福祉士の国家資格を取得し、社会福祉士の仲間との交流も始まり、ソーシャルワーカーとしての自覚、自信を強めていった。

その後、1年間の研修プランナーの仕事を経て、新

しく開設された特別養護老人ホームの生活指導員として採用された。その半年後には、併設して開設されることになっていた在宅介護支援センターのソーシャルワーカー職に異動となった。以前、老人保健施設に勤務していた頃、同じ法人内で在宅介護支援センターが作られ、その動きを見ていたA子さんは、在宅介護支援センターこそ福祉の目指すべきところであり、また自分のやりたい仕事であると感じた。というのは、老人保健施設は施設内でのサービス提供に限定されやすいが、在宅介護支援センターはこちらから地域に出向き、サービス利用にこだわりを持つ高齢者にも声をかけ、時間をかけて信頼関係を築き、その高齢者の望む生活を作り出していくところに面白さがあるからだ。これこそ、ソーシャルワーカーの仕事だと認識している。

就職後15年目の42歳になった現在、職場内での権限はないものの指導的立場にあり(権限のある役職に就いていないことに不満はあるが)、職場内外の後輩を育てていくことに意欲を燃やしている。また、在宅介護支援センター連絡会などを通しての情報・意見交換を活発に行い、職場外では介護支援専門員の実務者研修の講師、介護認定審査会の審査員としても活躍している。

3. 転職キャリアアップタイプ～B子さんの生活史

① 就職前

1950年に職人の父親をもつ4人姉妹の次女として出生。高校卒業前、父親を交通事故で亡くしたため大学進学を断念し、自活のため看護学校に入学して、卒業後は看護師として働きながら、一人暮らしを始める。子どもの頃から正義感の強いところがあり、現在の社会福祉士事務所の開業など、社会的活動の原動力となっているようだ。

② 就職～5年目

看護学校卒業後、21歳から24歳までの3年間は国立の医療機関、24歳からの6年間は民間企業の健康保険組合で看護師として勤務する。この頃から、B子さんは病院組織内の限定された看護職の仕事より、地域や社会に興味をもっていた。医師のアシスタントである病院看護師の枠に収まるのがいやで、社会性の強い保健婦的な仕事にやり甲斐を感じた。そのころ、健康保険組合で関東地方のサラリーマン約7,000人の健康相談とアンケート調査を行い、現役のサラリーマンのな

A子さんの専門的力形成過程

年齢	ライフステージ	印象的な出来事	力形成の契機
0歳	出生		
22歳	短大卒業（保育士免許取得）		
27歳	未婚のまま長男出生	児童扶養手当の受給→福祉事務所の対応への不満と屈辱感→誇れる仕事や人並みの収入への憧れ	⑬個人及び家庭生活における変化
28歳	市保育所臨時保育士		
29歳	県福祉事務所家庭児童相談員		
30歳	老人保健施設相談指導員（1ヶ所目）	立ち上げに関わる（1回目） 医療現場の中で、自分の役割を考え、国家資格取得の必要性を実感	②自分にとって意味のある職場への赴任 ①社会福祉実践上の経験
33歳	老人保健施設相談指導員（2ヶ所目）	立ち上げに関わる（2回目） 先輩ソーシャルワーカーTさんとの出会い（「あんなソーシャルワーカーになりたい」）	②自分にとって意味のある職場への赴任 ③職場内での優れた人物との出会い
37歳	病院精神科ソーシャルワーカー	医師を頂点とする保守的なピラミッド構造の中で働くことへの不満から社会福祉士国家資格の取得	⑭社会福祉士国家資格取得
38歳	福祉関連研修プランナー	社会福祉士会のメンバーとの交流	④職場外での優れた人物との出会い
39歳	新設特別養護老人ホーム生活指導員	立ち上げに関わる（3回目）	②自分にとって意味のある職場への赴任
42歳	新設在宅介護支援センター（特別養護老人ホームに併設）・ソーシャルワーカー（～現在に至る）	在宅介護支援センター勤務となり、地域との関わりを強め、居宅介護支援事業所の介護支援専門員となる。併設の特別養護老人ホームとデイサービスセンターのスーパーバイザー的役割。 介護支援専門員の実務者研修の講師、介護認定審査会の審査員など	⑨地域と職場への着目(地域の福祉課題の発見) ⑫職務上の役割の変化 ⑤職場内での研究活動 ⑧社会的活動への参加

かにアルコール依存症が多く潜在していることを知る。それに関心をもったことがきっかけとなり、のちに大学で社会学、大学院で精神保健学（アルコール依存症）の研究に向かうことになる。

③就職後5年～20年目

その後、30歳（10年目）で新しい大学病院の救急医療センターに勤務したり、また別の病院では在宅看護の必要性から訪問看護部門の立ち上げに参加したりした。しかし、同じ職場で5,6年過ごし、管理職になると辞めたい傾向があるようで、そんなとき先輩の看護師から、自分の成長のために大学へ進学することを勧められた。その先輩も看護師としての知識だけに飽き足らず、通信講座で大学卒業の資格をとっていた。次の職場の同僚看護師も、相談援助のためにカウンセリングの勉強をしていた。これらのよき先輩の姿が刺激となり、また医療以外に社会や人間の営みというものに興味もあり、夜間大学で社会学を専攻した後、通信課程で社会福祉士受験資格を取得して、46歳（16年目）のときに合格した。また、この頃、自分の専門性をさらに高めるため、国立の社会人大学院医学研究科に入学し、精神保健学を修めた。

④就職後20年目以降

人間の生活を見る視点や、個人・家族のもつ社会資源や潜在能力をアセスメントするソーシャルワークへの憧れと期待。自分なりの技術や専門性を地域社会で生かす仕事がしたい。健康保険組合のような、組織に埋没した職場は卒業したい。そんな想いととも、40歳を過ぎたら、自分に納得できる領域でぜひ開業したいというかつての夢から、1998年の48歳（18年目）のときに社会福祉士事務所を開業した。

開業には介護相談を入りに最も柔軟な経営形態である有限会社にしたが、ソーシャルワークだけでは採算が取れないどころか、生活もできないと痛感した。ソーシャルワークについてはB子さんなりの理想があり、個人の人生の生きがいや生活の質をどうみるかという、生活の営みの視点が重要だと思っている。開業社会福祉士として、低所得者の介護に関する困難事例の相談にのって介護保険へとつなげているが、それはまさに重要なソーシャルワークの役割だと思う。しかしこのような仕事は収入に全く結びつかないのが現状で、開業ソーシャルワーカーには生活の充実と、ある程度の経済的裏付けも必要であると経験から学んだ。

また、Bさんはつねに自分の広い関心を研究へと

つなげ、キャリアアップに努力している。子どもの頃からの性格だが、社会への不平等や不条理に憤る素朴な正義感が強く、弱い者いじめや理屈の通らないことには常に抵抗し抗議してきた。慈善事業や社会変革を目指すアメリカのソーシャルワークにあこがれたのも、社会の不条理への抵抗に共感するからであった。アメリカ在住の日系2世の友人は、ソーシャルワーカーで社会変革や社会運動に通じ、利用者の利益のために活動しており、自分の利益のためには働いていなかった。まさにその友人は、B子さんにとってのモデル的な存在といえる。しかし日本では、適切なスーパーバイザーによるスーパーヴィジョンを受けた経験がなく、社会福祉士になってからモデルとなるようなソーシャルワーカーには出会ったことがない。

開業だけでは経済的基盤が弱かったので、看護学校、介護福祉士専門学校の非常勤講師を始めた。自分の体験や学んだことを若い学生にわかりやすく伝えることは、専門性を確認するうえでとてもよい勉強になっている。

職場内外での研究活動として介護保険の開始の年にある団体からの研究助成を受け、「身上監護の研究」をまとめた。この研究を通して、調査の技法、インタビューの仕方、アンケート調査の統計処理技術、研究プロジェクトをまとめる能力が大いに開発された。その他の委託調査としては、「福祉用具の利用促進」についての事例調査をした経験もある。また、「施設でのリスクマネジメント」「セルフケアマネジメント」など、介護分野でのソーシャルワークの調査研究にも取り組んでいる。他の看護師仲間、医師、公務員、医療ソーシャルワーカー、弁護士、社会保険労務士など様々な職種の人々とプロジェクトで協力し、報告書を作り上げる作業は大変勉強になった。権利擁護に関する研究調査事業や、その他の委託事業に関わっていると、介護保険施行後の地域における要介護者の実態を知ることができ、困難をかかえている人の代弁者として役に立ちたいとソーシャルワーカーの血が騒ぐ。介護保険利用の過程で困難なことが重なり、スムーズな利用に結びつかない個人を支援してサービスにつなげるのが、ソーシャルワークであると認識している。51歳（21年目）になった現在も、社会的正義感はまだ強く、地域の困難事例にはもっと公的な機関や施設が対応すべきと義憤も感じている。社会福祉士会のなかでも全国組織、支部組織でそれぞれ委員や研究メン

バーとして活動しており、さらに、自治体でも区の認定審査会委員、地元市の介護支援専門員連絡協議会など、公職を務めて多忙な日々を送っている。

4. 再社会参加・生活体験タイプ～C子さんの生活史

①就業前

1945年に四国で生まれた女性。大学(農学部)まで公立で、独立心旺盛に育つ。卒業後2年間の教員生活を経て結婚、子育て中の4年間は夫の任地であった南米で長女と長男を育てながらポルトガル語を習うと同時に、大学の英語科で学び始めた。しかし長男が難病を

発症し、急遽帰国、看病にあたることになる。長男は病気が回復する頃、反抗期を迎え親子げんかが続いたが、母親が干渉し過ぎない方がよいと判断し、40歳で社会福祉士養成校に入学し国家資格を取得した。

C子さんは、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを意識する以前に、自然への共感、人間への信頼感、人間の平等感を抱いていた。育った田舎の環境は経済的には豊かではなかったが、親類や近所の助け合いといたわりがあった。また、敗戦の影響が残っている時代であり、その反省から、家庭のなかには個人を尊重する雰囲気もあった。大学時代も結婚生活で

B子さんの専門的力量形成過程

年齢	ライフステージ	印象的な出来事	力量形成の契機
0歳	職人を父とし4人姉妹の次女として出生		
18歳	高校卒業	父親が交通事故で死亡	
21歳	衛生看護学院進学	進学を断念し自活の道	
21歳	国立の医療機関で看護師として勤務	終末期の専門看護研修を受ける	③職場内での優れた人物との出会い
24歳	健康保険組合の看護師	中小企業の健康相談	
30歳	大学病院の看護師	植物人間になった救急患者の家族に何もできずソーシャルワークの重要性に開眼	①社会福祉実践上の経験
33歳	メディカルセンター勤務	地域や社会に興味があり、訪問看護部門のたちあげを病院内に働きかけ実現	
38歳	企業健康保険組合の保健婦に就職	サラリーマン7千人の健康相談からアルコール依存症に関心をもつ	②自分にとって意味のある職場への赴任
46歳	通信課程で社会福祉士受験資格取得大学院修了	先輩の勧めで夜間大学院に進学(社会学専攻)	⑥職場外での研究活動 ⑭社会福祉士国家資格取得
48歳	社会福祉士事務所開業(有限会社として)	開業ソーシャルワーカーでは経済的自立は不可能	②自分にとって意味のある職場への赴任
		アメリカ在住のソーシャルワーカーとの交流	② 職場外での優れた人物との出会い
50歳	専門学校、看護学校での非常勤講師経験	「身上監護の研究」、「福祉用具の利用促進」、「アメリカの施設リスクマネジメント」の調査研究活動	⑤⑥職場内外での研究活動 ②自分にとって意味のある職場への赴任
		ソーシャルワーク業界の実態に疑問と義憤を感じる 社会福祉士会・自治体の委員会活動への関わり	⑧社会的活動への参加

も迷いや未熟さは多く経験したが、他人に決断をゆだねることはなく、自分で考えて行動できる自由、そして努力すれば自分の希望をかなえられる幸運に恵まれたという。

Cさんが社会福祉士養成校に入学し、そしてソーシャルワーカーとして再度社会参加するきっかけとなったのは、難病の長男を抱えた経験が大きかった。死を常に意識しなければならぬ子どもを家族で守る生活は試練の連続で、そのなかで悪戦苦闘したことが人生の最大の勉強となり、社会福祉にかかわる転機になった。

②就職～5年目

社会福祉士養成校卒業後、国家資格を取得し、1986年に41歳で地域活動への関心から在宅サービス事業所に就職、そのなかで様々な職種と役職を経験することになる。嘱託でスタートし、2年後にソーシャルワーカーとして専従職員となった。

職場での印象深い経験として、緑内障で全盲になった65歳の一人暮らしの女性を数年間事業所で支えたことがある。経済的には年金と持ち家があり恵まれていたが、大変プライドが高く、人づき合いや外出が嫌いで、福祉や医療関係者には強い不信感をもち、決して心の内を見せようとはしなかった。阪神淡路大震災のときに、原爆の被災者のために家族を失ったことを初めて語った。失明の原因は、治療に通わなければ失明すると医師から告げられたが、一人で通院できないうちに、徐々に見えなくなると話した。そんな女性に対し、配食、ホームヘルプサービス、生きがいをづくり、外出などいろいろと工夫して支援した。音楽鑑賞と文学、絵画鑑賞、茶道などの教養もあり、本物志向の大変厳しい鑑識眼をもっていた人だったので、生きがいをづくりとして『源氏物語』を講じてもらったこともあった。こうして、ボランティア仲間が集いながら、いきいきと生活し始めたが、肺ガンが発見され手術が必要であることがわかって、入院を拒否し続けた。最期は遺言書もないまま亡くなり、誇り高い孤高の人として印象に残っている。

このケースを通じて、ソーシャルワークとはその人の考え方や生き方を尊重することであり、「援助する」というより「共に歩む」という表現が当てはまると感じた。

③就職後5年目～20年目

1993年、就職して4年目の48歳のときに係長に昇格

した。いわゆる対象別ではない生活支援を目指して、事業所では公的ホームヘルプサービスの受託事業、在宅介護支援センター、デイサービス事業、身体障害者や精神障害者の在宅介護支援、さらに介護保険事業など、事業の拡大を推進していった。それは同時に、職員の実力を向上させ、専門職としての力をつけるシステムを作るということでもあった。そこで実践したことは、ソーシャルワーカー、看護師、ホームヘルパーによる文字通りの「医療と福祉の連携」だった。チームで徹底して議論し、情報を共有して、それぞれの専門的な判断力をつけていった。ケースカンファレンスを月1回、新規受け入れケースの検討会（サービス評価会議）を週1回、必ず開き、担当者全員で意見交換と情報を共有しながら、勉強と実力向上の機会を提供してきた。また、多様な勤務体制と待遇を工夫したシステムも開発した。

④就職後20年目以降

2000年、就職して6年後の50歳で事務局次長となる。在宅介護支援センターの開設の際に、センター長を兼ねるようになり、運営管理面を工夫するように努めた。2000年度に入ると、介護保険の在宅部門の責任者として経営管理に重点がシフトしてきた。それ以降、介護保険の報酬で経営・運営を合理化し、かつ質のよい利用者本位のサービスができるような管理システムづくりに熱心に取り組んでいる。Cさんは上から与えられた仕事をこなすだけの職員は、行動力が不足し、コスト感覚が鈍くなることを感じている。民間NPOの介護サービス事業所管理者としての経営感覚が、日々の運営経験を通じて一層研ぎ澄まされている。

また、Cさんは理科系出身であり文学書を読まなかったが、成人以降、地域の読書会でいろいろな分野の本を読んだことが今の仕事に役立っているという。「ソーシャルワークの専門的の力量とは、普通の生活者の視点で利用者の人生に沿って、その人の生活をどれくらい深く理解できるか、そして、その人の伴走者としていかに寄り添っていけるか、その上で、利用者の問題解決のためにあらゆる人的・制度的社会資源を使いこなせるか」が持論である。

生活体験や意味ある人との出会いに強く影響されているCさんの行動特性は、「再社会参加・生活体験タイプ」といえる。このような人間的な側面と市民感覚に、福祉サービスの合理的経営感覚も共存している。介護保険制度のもとでは、市町村が質の高い福祉サー

ビスを市民に保障する責任があるが、公的サービスがすべてまかなうことは時代にそぐわないと考えている。かといって、民間に「丸投げ」したのでは利益追求を行うための弊害があり、サービスの質と現場で働く人の

労働条件が軽視されるとも思う。住民参加型のNPOの形をとれば、民間の発想で質の高いサービスを提供でき、その追求こそが自分の責務と自負している。

C子さんの専門的力量形成過程

年齢	ライフステージ	印象的な出来事	力量形成の契機
0歳	出生		
22歳	理科系大学卒業教員として就職		
24歳	結婚		
30歳	夫の任地南米で長女・長男の育児	ポルトガル語を習い現地大学の英語科に入学 長男が難病になり帰国	⑬個人および家庭生活における変化
40歳	社会福祉士養成校入学	地域の主婦との読書会(普通の生活者の視点や生活体験を人との出合いで蓄積) 長男の病は落ち着くが、反抗期に入り、母親があまり構わない方が良いと家庭外に出る	⑥職場外での研究活動
41歳	地域の介護サービス事業所に就職	社会福祉士国家資格の取得	⑭社会福祉士国家資格取得
42歳	嘱託	一人暮らしの女性をささえる	①社会福祉実践上の経験
44歳	専従ソーシャルワーカー	同職種チーム制の徹底とケースカンファレンスの意見交換 多様なチーム勤務システム	②意味のある職場への赴任
48歳	係長	公的ホームヘルプ、在宅介護支援センター、デイサービス事業開始、	
55歳	事務局次長(在宅介護支援センター長兼)	管理運営面・経営面の工夫 介護保険事業にも拡大	⑫職務上の役割の変化

女性ソーシャルワーカー3例の力量形成の契機

1. 3人の事例への考察

3人が人力量形成の契機としてあげた14の項目について、3人のライフコースの中でとくに本人が契機として強調した事柄について、項目別に考察してみる。

①社会福祉実践上での経験

A子	老人保健施設の立ち上げにかかわったことで、自分の役割について意識するようになった。
B子	事故で植物人間になった患者に何もしてあげられなかった無力感。
C子	65歳の独居のプライド高い女性に源氏物語の講義をしてもらい、生きがい作りになったことから、ソーシャルワークとは共に歩むことと実感する。

A子さんは保母の資格を持ち、最初家庭児童相談員で働いている間、また老人保健施設の生活指導員に初めてなった頃もソーシャルワーカーの自覚は特になかった。しかし、次に正雇用として老人施設に採用され、施設の立上げに参加したことが一番劇的な仕事として達成感を感じさせ、ソーシャルワークの何たるかに自覚させたといえる。

B子さんの場合も看護の現場であったが、その後一生忘れられない患者との出会いをしている。医療の側では、事故で植物人間になった患者に生命維持装置で生かしておくしかできなかったが、家族を支える支援チームを組織する人間関係やコーディネートするソーシャルワーカーという役割があることを知る。

C子さんの場合、プライドの高い盲目の一人暮らし女性を末期癌で看取るまで「共に歩む」と言う姿勢で支え、まさに孤独な女性の生涯、生きる姿勢から自己決定の重みについて考えさせられている。与えられる援助ではなく、芸術へのこだわりや好きな「源氏物語」を自ら講義することから得られる生きがい、その機会を提供すること、これこそ人間の尊厳に相応しい援助であるとして、ソーシャルワーカーの伴走者としての意義を再認識している。

この実践上での経験、特に利用者に取り組んでの経験は男女に関係なくほとんどの調査事例に見受けられる。現場に出て数年で一生忘れられない患者、クライアントとの出会いをし、その後の職務遂行に大きな影響を及ぼしている。ヒューマンサービスという仕事の性質上、これがなければ専門職としての成長も、大きく職業人としての幅を広げることもない。その意味で、教育現場では「生徒が教師」と言われるように、臨床科学であるソーシャルワークでは研究調査や論文で力量が形成されるのではなく、実践こそ修練の場で「クライアントが教師」だと言える。

②自分にとって意味ある職場への異動

A子	児童関係の嘱託相談員から老人保健施設の相談指導員として福祉の現場に職を得る。
B子	企業健康保険組合の保健婦として就職し、ソーシャルワーク的視点を養う。
C子	地域の非営利組織（公社）介護サービス事業所に立ち上げから参加。

これも男女に共通する契機であるが、今回の3例は

中途からこの分野に入った女性で、特に自分から新しい職場を求めて同じ分野の施設に移動している。これはここ10年ほど、高齢者関係の施設、在宅介護支援センターなどの増設が続き、経験のない中途採用者でも指導的なポストに就ける機会に恵まれたからである。またA子・B子さんの場合、どちらもマンネリ化した同じ業務の繰り返しや硬直化した組織内での保守的な業務遂行に飽き足らないタイプであり、自ら自分の興味とチャレンジ精神が活かされる職場を求めて、外に出てそれが叶えられている。

C子さんに限っては年齢が多少高かったこと、もともと「地域福祉」への志が社会福祉士につながり、最初の職場が個人的に縁のある地域でNPO的在宅介護事業所のたちあげであったので、家庭の事情による中断もあったが、一貫して同じ事業所で、地域で人材と組織を育て続けている。しかしこれが、C子さんにとっては介護保険事業の開始で経営的手腕が試され、経営責任者として熟練していく結果につながった。主婦として地域で生活した経験が訪問介護員がチームで動けるような職場環境づくり、研修システムづくりにも、大いに役立っていると語っている。主婦だった訪問介護員のやる気を引き出して、在宅介護の前線を担う人材に磨き上げていくにはC子さんは適任といえる。

③ 職場内での優れた人との出会い

A子	老人保健施設でモデル的すばらしい先輩ソーシャルワーカー、Tさんと出会う。
B子	企業健康保険組合の保健婦だったころ、自分も大学など外で勉強している先輩から、夜間大学に行くことを進められる。

Aさんは老人保健施設の相談員の時、モデルとなるべき先輩に出会い、ソーシャルワーカーとして自分の目標とした。Bさんは看護婦の時代、職場でマンネリ化しそうな時期に、カウンセリングを勉強して職場で生かしている先輩から触発された。また大学で勉強して日夜自己研鑽に励んでいる先輩には、夜間大学で勉強して視野を広げることを勧められている。

C子さんの場合、40代でかかわった地域のNPO事業所では、おそらく年齢的にも高い方であり、学歴、資格から主導的立場であった。中年ヘルパーなど40代以上の関係者は職場に多くとも、自分がソーシャルワーカーとしてリーダーなので、自分が影響を及ぼし

でも触発されることは、少なかつたと思われる。

④ 職場外での優れた人との出会い

A子	社会福祉士会の先輩メンバーで活動に熱心な姿から職能団体の良いイメージを持つ。
B子	アメリカ在住のソーシャルワーカーから社会のため、社会的に弱い人のために働くという価値を強調される

A子さんが職場外での影響を受けた人は社会福祉士のメンバーである。保守的組織では居心地がわるく、その不満のエネルギーを国家資格取得に向けたA子さんであるから、職能団体にも期待して入会し、県支部の活動にも積極的に参加した。その積極性が良い交流や出会いを生み、次の職場獲得にも生かされている。

B子さんの職場外での出会いは日系二世のアメリカ在住のソーシャルワーカーであるが、本場のソーシャルワーカーの態度や価値観を感じ取り、日本のソーシャルワーカーの未熟さとソーシャルアクションの不足を認識している。その義憤が一匹狼として、経済的には採算のとれない社会福祉事務所を開業し、地域の困窮者の在宅介護支援を支えるエネルギーになっている。

C子さんの力量形成の契機には「職場外での優れた人との出会い」としては、インタビューでも特に語られていなかった。ただ世話になった人物として、市の高齢者福祉課長の女性職員に、事業所立上げでいろいろ指導してもらったことが語られた。行政の一線で長年活躍している女性職業人への一種の尊敬を感じたが、「仕事の内容も違い大きな影響を受けるような関係ではなく、事業所が市と協働していく中で、いろいろ便宜を図ってくれた」という。

⑤ ⑥職場内外での研究活動

A子	併設施設の生活指導員のスーパーヴァイザーと事例研究など意欲的に行う。
B子	「身上監護の研究」「福祉用具の利用促進」「リスクマネージメント」など研究助成を受けたり、団体の調査研究など活発。
C子	地域の主婦との読書会で普通の生活者の視点や生活体験を蓄積した。

A子さんは、在宅介護支援センターのソーシャルワーカーとなり、ケアマネージャーとして活躍する一方、

併設特別養護老人ホーム内の生活指導員のスーパーヴァイザーと事例の研究などにも意欲的である。B子さんも社会福祉士事務所経営者としてその分野の研究委員会などに参加する他、介護保険がらみの職場内外での研究調査活動を盛んに行っている。これは調査研究での団体からの助成金が事務所運営の一部にあてられることもあり、外での講演活動、講師依頼へつなげる人的ネットワーク形成上、個人事務所には大きなメリットもあった。

職場外での研究活動はB・C子さん2人がソーシャルワーカーの自己研鑽の最も典型的な形として盛んに参加している。B子さんは社会福祉士の職能団体を通じて共通のテーマで調査研究する仲間にも恵まれ、介護保険の利用者のための権利擁護やリスクマネージメントに関する先駆的研究を行っている。C子さんは社会福祉士養成学校に通う前、地域の住民で読書会を継続し、そこで読んだ文学書が人生の深さを考える上で、またソーシャルワークの神髄である、援助ではなく「共に歩む」という姿勢を学ぶのに役立っているという。

⑧社会的活動への参加

A子	在宅介護支援センター連絡会特別部会や介護認定審査会の審査委員など
B子	社会福祉士事務所開設。職能団体の研究委員活動から地域の介護認定審査会の委員
C子	日本社会福祉士会の生涯研修委員など。

A子さんは在宅介護支援センター連絡会特別部会や介護認定審査会の審査委員など、B子さんは社会福祉士事務所を営しながら、職能団体の研究委員活動から地域の介護認定審査会の委員をしている。また低所得者や多問題世帯への在宅介護支援センターでの対応が充分でないことへの疑問をもち、生来正義感が強いため黙っていられず、社会的発言や活動に結びついている。

⑫職務上の変化

A子	新設在宅介護支援センター立ち上げにタッチし、ソーシャルワーカー兼ケアマネージャーとして地域の福祉課題に取り組む。
B子	同一職場で5、6年と長くなり、管理職になりそうだと意図的に他の職場に移る。
C子	一貫して同じ地域の非営利組織の介護サービス事業所で働き、係長からセンター長まで昇進。

同じ職場で数年たち管理職的ポストになると興味を感じなくなるB子さん以外2人は、それぞれ大きな業務上の変化を経て、ポストが上がったり仕事での新たな方向を見出している。A子さんは、同じ職場で施設内の職務から地域への在宅介護支援に業務転換したことから、地域の介護ニーズや福祉課題に大きく目を開くことになり、生活指導員のスーパーバイザー的役割を果たすなどソーシャルワーカーとして力をつけた。C子さんは15年以上同じ職場で、ヘルパーチーム編成と勤務体制システムの設立から在宅介護事業の運営管理面まで業務の幅を広げ、介護保険事業の開始と並行して、係長からセンター長という管理職ポストまで昇っている。それは本人の意図ではなかったが、まさに一所懸命に地域介護サービスのために働き、小規模な組織だがポストに反映している。

B子さんは組織で管理職になることを求めず、むしろそれを避けて一匹狼の生き方を貫き、個人の社会福祉士事務所を開設した。ソーシャルワーカーとして文字通り社会全体をフィールドに、金銭的なゆとりとは縁がないが、独身ということもあり、常に社会改良を視野に入れて活動している。

⑬個人および家庭生活における変化

A子	未婚の母として生活保護申請の相談をするほどの経験をした。福祉事務所の対応への不満が社会福祉士の専門性を考え、資格取得への意欲になる。
C子	長男の難病治療のため帰国したことから福祉への関心を持ち始めた。その後の反抗期で子どもから距離を置いて関心を他に向けようとしたとき、福祉の分野を選んだ。

A子さんの場合、未婚の母となり生活保護受給のため福祉事務所に相談したが、その対応に大きな疑問と

不満をもち、後の社会福祉士資格取得への意欲につながっている。C子さんの場合、長男の難病の治療のため外国から帰国したが、病が一応治ったものの反抗期にかかり、子供との距離をおくため、関心の深まった社会福祉の勉強に入っており、ともに社会福祉の分野に接近した契機になっている。

2人の事例のような家庭を持つ女性の場合、離婚、介護、子育てなど家族生活の変化が福祉と接する契機となり、福祉問題に目覚めることが多い。これが高じて福祉を仕事として選ばせる動機や資格取得にも通じるわけで、家庭生活の変化は力量形成というよりは、そのルーツ、出発点となりうる。また人間的な幅を広げ、人間理解を深める機会も多く提供する。

⑭社会福祉士国家資格取得

A子	通信課程で大学卒資格取得もあわせて、仕事をしながらスクーリングなど資格取得のために努力した。
B子	保健婦業務をしながら大学卒、大学院卒までの資格を既に取りっていたが、改めて社会福祉士取得のために通信課程で仕事と勉学を両立させた。
C子	社会福祉士取得のための社会福祉士養成学校の1年コースで、家庭生活をしながら充実してゆとりある勉学体勢であった。福祉現場経験のクラスメートと机を並べて、話が聞けたことが貴重な勉強になった。

3人ともに、大きな力量形成の契機と人生の転機に結びついている。短大の保育士資格をもつA子さん、看護学校卒のB子さんともに社会福祉士受験資格を得るため、通信課程で大学卒業資格とともに受験資格を得た。仕事をしながら数年間スクーリングや受験勉強を両立させたその情熱や意欲は、人間性とソーシャルワーカーの力量を大きく広げた。無論社会福祉関連の専門知識の習得や資格取得者の先輩たちとの交流も大きい。二人ともその前にいくつかの職場と職業を経験しており、資格取得以前にすでにソーシャルワークの専門性は蓄積されていたと言える。社会福祉士の資格は最期の仕上げ、まさに看板のようなものであるが、二人の専門職としてのアイデンティティ獲得には大きく寄与している。

またC子さんも家庭の事情で再社会参加を目指し、

とっかかりとして社会福祉士養成学校に入ったが、地域や子育ての経験、結婚前の教員経験など多くの社会経験を持っていた。初めての職業としてより、人生経験を生かした分野として社会福祉へ参入したという点では、ソーシャルワークへの一種の憧憬から看護婦の経験の上に社会福祉士の資格をとったB子さんに共通するものがある。

2. 女性のライフコースと女性ソーシャルワーカー

全体の考察をしてみると、ライフコースにおける契機で結婚や子育てという女性としての特徴が目立って表われているのはA子・C子さんである。A子さんは一人親家庭として働く必要があり、生活費と誇れる仕事として保育士の資格を生かして社会福祉分野を選んだ。C子さんは子育て後の再社会参加として、地域での生活経験が生かせる分野として福祉分野を選んだ。

どちらも子育てというキーワードが多少絡んで社会福祉分野に参入しているが、その後の仕事の継続、その他の契機にことさら、女性ということが影響していることはない。ただC子さんの場合には、介護保険事業が落ち着いた頃、家族のことで一時、中断していることがある。これも母親としてで、女性ゆえの特徴と言えるかもしれない。他の契機については、前11事例の中の男性のインタビューケースと全く差異がなかった。

以上今回のソーシャルワーカーのライフヒストリー調査の考察としては、ケース例が少なくとくに女性としての類似点や特徴を強調することには無理がある。B子さんは一人独身、A子・C子さんは、結婚、子育て後または並行して、社会福祉やソーシャルワーカーとして参入しており、女性としての結婚・出産・子育てがソーシャルワーカーとしての職業発展には直接影響してはいない。したがって、今回の3例からは、女性のライフコースとの力量形成の契機を直接関連づけるには無理がある^{註4)}。しかし、C子さんが子育て後のエネルギーを社会福祉の勉強や資格取得に向けたように、また、A子さんとC子さんが子育ての経験は地域や人間を理解する上で大きく役立ったと振り返っているように、多少の影響を与えている。

筆者は50歳前後の女性ソーシャルワーカーの特徴として、他分野からの中途参入者が多く、なおかつ力量形成に積極的ではないかという仮説を立てていた。C子さんは文字通り子育て後の社会参加であり、B子さんは経済的独立を余儀なくされて看護婦として働いた

後、地域や社会的活動にあこがれソーシャルワーカーの道を選び、A子さんは未婚の母で経済的困窮に遭遇してもその後、保育士としての福祉職を得て、それを高齢者分野やケアマネジメントに広げ、資格を取得後は自分のやりたい仕事の領域を得ている。

その意味で、この3例はすべてソーシャルワークへの中途参入者であり、敢えて楽な事務職や収入だけの道を選ばず、また職場や組織の中での地位やポストの上昇を求めず、自分の理想とする価値観でソーシャルワークを実践している。また資格取得だけでなく、自らの技術向上、自己研鑽にも熱心で、その意味でまさにソーシャルワーカーの倫理綱領に忠実なモデルと言える。

また男女機会雇用均等・共同参画時代に相応しく、ライフコースや力量形成の契機についても男女の差はソーシャルワーカーには存在しない。しかし、それがあるとするならば、女性のソーシャルワーカーの方がより純粋にソーシャルワーカーの理想に忠実であることではないだろうか。なぜなら、今回一応ソーシャルワーカーとして中堅の仕事としている男性、6事例のほとんどは、大学から、また初期の就職先として社会福祉の道を選んでいる。一方女性5例のうち4例が人生の途中で、また3例は社会福祉分野の経験もなく、敢えてゼロから多少の苦勞を覚悟でこの道を選んでいるからである^{註5)}。社会福祉分野に就労している男性で、中途参入の道を選ぶ事例が多く存在するならば、これも男女の差異はないことになるが、身の回りの多くの社会福祉士、福祉の現場の中堅職員で男性の中途参入は少ない。大学も福祉系ではなく、全くゼロから資格取得の勉強をしながらソーシャルワーカーを志す男性はもっと少ないのが事実である。

近年介護の職場が増えたことで、失業や退職を機に他職から介護資格を取得して転業する男性は、多少増加している。それは介護職の場合、施設が増加傾向にあるために雇用の場が増加している状況であり、直接援助の介護職は人間的ふれあいと福祉的な満足感が大きいので、他分野から参入してくるのである。しかしそうだとすると、女性のほうがその数は多く傾向も強い。家族の生活を支えるという経済的必要性の少ない若い男性や60歳以上の退職者なら介護職転職組も見られるが、40代、50代の家族の大黒柱では見られない。

つまり女性の独身者や主な家計は夫に頼れる中年女性なら、ソーシャルワーカーとしての志を中途参入で

も実現できるからである。これはB子さんが社会福祉士開業では食べていけないと言っていることの裏返しであるが、資格をもっている、在宅介護支援センターのソーシャルワーカーや施設の生活相談員のポストに就かない限り、生活の保証はない。また、その職は介護職のように雇用の数も多くなく、中途ではなかなか就職も困難であると考えられる。

以上のような雇用の現状と照らし合わせて、経済的責任の重くない女性の方がソーシャルワーカーを中途で志す人が多いと同時に、ソーシャルワーカーの社会的使命に忠実な生き方が可能になる。以上が、今回の力量形成のライフヒストリーの3事例の考察から一般化できることであった。今後事例を増やし、世代による違いなども女性のライフコースとの関連で研究を続けていきたい。いずれにしても、本論文は中間報告であり、今後の研究継続による事例集積の重要性が強く認識された。

注

注1) 財団法人・安田生命社会事業団 「研究女性論文集」2001年保正友子・鈴木真理子他による継続研究で、これに関するものとして「社会福祉士の成長過程についての検討」社会福祉士 第9号 p143～147などがある。

注2) 山崎準二『教師のライフコース研究』創風社 2002年、草刈淳子『看護管理者のライフコースとキャリア発達に関する実証的研究』看護研究 29巻 No2 p31～45。

注3) 一皮むけた経験として本人が職業生活を振り返って認識できる、昇格、転勤、抜擢された大きなプロジェクトなどが考えられる。

注4) 子育ての地域ネットワークを組織してソーシャルワーカーの力量形成の契機になったとか、出産や教育、地域活動で子供をきっかけにソーシャルワークのフィールドや人間関係、経験を広げたという事実は3人に見られない。

注5) 残り女性の1事例は、理事長である父親の特別養護老人ホームで、離婚後、子育てしながら寮母として就職し、その後生活指導員としてソーシャルワーカーとなった例で、中途参入と言える。もう一例は大学は福祉系ではないが、就職で親の関係していた社会福祉法人に大学卒業と同時に就職している。

参考文献

- 稲垣忠彦他 1998 教師のライフコース～昭和史を教師として生きて 東京大学出版会
梅沢 正 2001 職業とキャリアー人生の豊かさとは一学文社
武野 昭 2001 人と組織を変えるコンピテンシーオーエス出版